

第2話

「空堀」が物語る 長屋再生の価値とは

弘本 由香里

Written by Yukari Hiromoto

写真：太田順一

はじめに

近世から近代へ、大阪のまちを構成し、その活力を支える基盤として圧倒的な存在感を發揮してきた大阪の長屋。優れた都市住宅として、他に類を見ないほど多様な発展を見せ、開発の波に洗われながら、現在もお大阪の

典型的な住まいとしてまちのあちこちに生き続けている。

今、大阪市内の各所で長屋再生が注目を集めているが、それは、過去形で振り返る歴史的価値の再生ではなく、過去から現在を経て未来へと続くリアルな都市と住まいの物語としての意味を孕む。大阪の長屋再生を通して、現代の都市問題・住宅問題にアプローチし、それを解く鍵を見つけることができなにか。そこに住み・暮らす主体の側から、都市づく

りのシステムを組みなおしていく、都市再生の核心を、長屋再生ムーブメントに読み取ることができるのではないか。そんな思いから、本連載をスタートし、前回(第一話)は、長屋をめぐる考察の導入として、大阪の長屋における歴史の連続性と多様性に焦点を当て、そ



“坂のまち”と言われる空堀商店街界隈。石畳と石垣と長屋の風景

の特性を大まかに概観した。

第二回目の今回は、大阪市中心区内にあって奇しくも戦災を免れ、今なお長屋で構成された街区の姿をふんだんに残す、空堀商店街界隈での長屋再生の動きにスポットを当て、その意味を筆者なりに読み解いてみたい。



まちのあちこちで大切に祀られるお地藏さん



路地の奥に繊細な意匠を凝らした長屋が軒を連ねる

空堀商店街界限と 長屋の特性

まず空堀商店街界限の来歴をたどっておこう。大阪城の天守閣付近を北の起点に、大阪市内を南北に貫く上町台地上に、通称「空堀商店街」は位置する。台地上には、上町筋、谷町筋、台地の西側直下には松屋町筋、三つの大通りが平行して走っているが、大阪城天守閣から約二キロメートル南に下ったあたり、上町筋から谷町筋をまたいで松屋町筋まで、上町台地をダイナミックに東西に貫く商店街が通称「空堀商店街」である。

「空堀」とは、かつて豊臣秀吉が大坂城を築城した際、南面を防御するために構えた三の丸の外堀「南惣構堀」に当たる。慶長十九年（一六四四年）大坂冬の陣の後、徳川方に埋められてしまうまでは、ここより北が大坂城内だった。江戸時代初期の空堀は、御用瓦師の瓦土取り場だった。現在の空堀商店街の両側が低く窪地になっているのは、その名残である。その後、江戸中期頃から市街化が進み、長屋の建ち並ぶまちになっていったといわれる。表通りに面した長屋建ての町家と、路地を入った裏長屋で構成される町並みのものが形成された。

現在の商店街の原型は、明治から大正時代に遡る。地元の「延命地藏」の縁日に立った定期市や夜店を発端に賑わいが定着。大正時代末の道路拡張「軒切り」で四メートルの街路が

六メートルに広がり、今に続く商店街の骨格が形づくられた。戦時中も奇跡的に空襲の被害を免れたため、戦後はいち早い復興を遂げ、市民の生活を支えてきた大阪を代表する商店街の一つである。

ちょうど、東は地下鉄谷町線・鶴見緑地線「谷町六丁目」駅、西は地下鉄鶴見緑地線「松屋町」駅にはさまれた好立地。そして、台地上から台地下へと向かう商店街の東西方向の大きな坂道はもちろん、商店街を尾根に南北にも小さな坂や崖を持つ起伏に富んだ地形がこのまちの魅力を増幅している。旧大阪市電の軌道の敷石を張ったという石畳も、路地のあちらこちらで存在感を放っている。坂の多いまちならではの、石畳の階段や煉瓦積みみの建物の基礎や石垣に出くわすのも魅力である。

震災を免れた空堀商店街界限では、戦前からのまち暮らしの風景が途絶えることなく生き続けてきた。社会の変化の中で、建物自体はかなり更新されており、近世の建築物は姿を消しているが、奥行きのある独特の長屋のまちの骨格は引き継がれ、明治・大正、そして昭和戦前期と、築七〇〜一〇〇年を越える長屋が姿を留めている。表通りではオフィスビルやマンションに建て替えられたものも多いいとはいえず、またまた明治期の塗り込め（漆喰）の長屋や、昭和初期と見られる銅板やタイルの壁に箱軒の長屋が多数見られる。路地の奥に並ぶ裏長屋も、新建材に覆われてきてはいるが、大正から昭和戦前期の風情を留めるものには、繊細な格子やガラス窓など質素なが



共同井戸が姿を留める路地もある

ら品のある意匠を残しているものがある。
もちろん、路地のまちの暮らしの機微や風習もすっかり伝えられている。まちの要素所には、地藏堂やお稲荷さんの祠が大事に祀られている。お風呂屋さんも現役。お互いを気遣い支え合う、路地コミュニティはまだ健在だ。

温存されている 都市再生の鍵

近世大坂の町人たちによって形成された質量ともに豊かな長屋の系譜。そこに根を持つ

空堀商店街界隈は、表面的には姿を変えながらも、基盤の奥深くには近世に練り上げられた都市の構造が温存されている。皮肉にも、近現代の法律に照らした際に既存不適格となったまちの構造が、経済効率一辺倒の都市開発の手を阻んできたわけであり、そこに本来あるべき都市再生の核心、つまり成熟社会における持続可能な都市の発展や都市居住のモラルを支えるシステムの鍵が眠っていると見ることが出来る。

二〇〇一年四月に発足した「空堀商店街界隈長屋再生プロジェクト(からほり倶楽部)」は、空堀のまちに眠る資源を目覚めさせ、時を経た長屋のまちの価値の継承と、新たな文化との融合を可能にする、内発型・持続型の地域ビジネスを掘り起こしつつある例ともいえる。有志とともに同組織を立ち上げた、代表の六波羅雅一さんは、十五年ほど前から空堀に仕事場と住まいを構え、家族とともにこのまちに根を下ろし、その魅力を感じてきた一人である。都心にありながら、昔懐かしいまちの風景、木や土でできた長屋の建築としての素晴らしさ。路地や石畳・石垣がつくる人間的な空間の優しさ。「その一つ一つに心引かれていった」と。その一方で、「現行の建築法規のため、道路に接していない家屋は建て替えることができない。放置されて廃墟と化していく長屋もあり、解体され更地のままになることも少なくない。老朽化した長屋でも、柱や梁さえしっかりしていれば、改修して十分に住み続けることができる。大掛かりな解

体工事をして駐車場をつくるくらいならば、環境のためにも建物本来の魅力を活かして、まちの人も喜ぶ形で残していくことができないうものかと考え始めた」。そんな思いを形へと、長屋再生活動を展開している「からほり倶楽部」のプロジェクトをはじめ、他の実践例も含めて、空堀商店街界隈の印象的なシーンのいくつかを追いながら、長屋再生ムーブメントの中に、都市再生の鍵を探っていきたい。



空堀商店街界隈の魅力を紹介するマップ。
からほり倶楽部(空堀商店街界隈長屋再生プロジェクト)制作

新旧長屋の競演に 学ぶ視点

谷町筋と松屋町筋の間、長堀通と空堀商店街を突き抜けて走る、御祓筋^{おほろすじ}。空堀界隈を代表するストリートの一つである。この道沿いを歩くだけでも、数々の空堀名物に出会うことができる。昔ながらの姿を貫く現役長老長屋と、新たな価値を吹き込まれた再生長屋が混在する様は、少々大げさにいえば、青空のもとでの生きたシヨールームか博物館とでもい



「菱屋カレンブロッソ」。和の生地を活かしたバッグがショーウィンドーを飾る

うべき眺め。そこから学べるものも多い。空堀商店街から御祓筋の北側・長堀通近くには、鼻緒の生地パターンを使ったバッグ等で有名な「菱屋カレンブロッソ」。長屋の漆喰の壁を引き立たせる、真っ赤な内装壁。緊張

感溢れる粋な店の姿が通りに際立つ。そのはす向かいには、昔ながらの心とむ風情で、思わず暖簾をくぐりたくなる「丸芳食堂」。通りをはさんでの絶妙な対照。まちの基層文化があつてこそ、新たな感性と旧来の感性が互いに響き合う好例ともいえる。

ここは、四辻特有の隅切り型の長屋が三軒揃うビューポイントでもある。写真やスケッチに訪れる人も多い。

四辻から空堀商店街に向かって歩を進めると、路地の入り口に路地組合の方々の名前が並ぶ「石丸会」の門が目にとまる。路地の奥には、石丸大明神・玉姫大明神を祀る見事な祠。さらに御祓筋を進むと、駄菓子屋さん「空堀レトロ」。そこから少し路地を入ったところに、陶芸工房「創房・心裸(しんら)」「茶房・暝(めい)」「カレー店・空堀ノスタ」がある。そもそもは地元で陶芸と紅茶販売を生業にする岡田昌之さんが、築一〇〇年以上の長屋の大半をセルフビルドで改修して開いたものだ。現在プロの手を入れて改装中だが、当初岡田さんが実証してみせたセルフビルの挑戦は、後続の長屋の改修を志向する人たちに大きな力を与えてきた。



岡田昌之さんが三軒の長屋を一体的に改修。陶芸工房「心裸」や茶房等を営む(現在改装中)

「長屋の改修工事全体を大工さんに頼むと、
 そうとうな金額になってしまふ。長屋の再生
 を経済的に成り立たせようとすると、構造や
 設備など安全上プロの技術が不可欠な部分は
 建築士や大工さんにしっかり頼み、その他の
 自分でできるところについてはできるだけセ
 ルフビルドでやろうというのが有力な手法に
 なる」と、六波羅さん(からほり倶楽部)もいう。
 セルフビルドの現実的なきっかけは、経済
 的な効用である。しかし、最終的に最大の効
 用は、建物とそこに住む人・商いをする人の
 深い応答関係をつくることにある。そこに生
 まれる自己表現の達成感や愛着、そしてきめ
 細かな手入れの技が、結果として建物の寿命・
 価値を飛躍的に伸ばしていくことにつながる
 からである。

長屋・屋敷再生 プロジェクトの意味

空堀商店街を横切って御祓筋を少し南へ進
 むと、からほり倶楽部の活動のエポックとな
 った、長屋再生複合ショップ「惣」が見えてく
 る。朽ちかけた長屋を、解体して駐車場にす
 る計画が進もうとしていたが、からほり倶楽
 部が長屋を借り受け、店舗を誘致して活用す
 る提案を所有者に持ちかけ、見事に成就させ
 た事例である。二〇〇二年七月オープン。二
 軒の長屋だった空間には、まちの人に気軽に
 入ってきてもらいやすいようにと、中央に共



長屋再生複合ショップ「惣」(からほり倶楽部)。改修された二軒長屋で五つの店が営業



「惣」の内部。オープンな路地風のアプローチで各店が
 つながっている

用のアプローチとしてオープンスペースを設
 け、そこから五店が自然につながる。ペット
 グッズ、和雑貨、カフェ&ギャラリー、手作
 り雑貨、パワーストーン…。
 賃料は安く抑えられ、商売は初めての挑戦
 という店主も多い。「惣」での体験が出店者や
 からほり倶楽部の面々の成長の物語そのもの
 としてアイデンティファイされている。お互
 いに汗をかいて開店にこぎつけたセルフビル
 ドの内装といい、自己実現の夢を持ち寄って
 成長する共同体のシンボリック長屋再生、手作
 り複合ショップである。

「惣」の成功を礎に、お屋敷再生複合ショッ
 プ「練」も二〇〇三年二月にオープンした。眼
 鏡、バッグ、着物に、チヨコレート等々、こ
 だわりの店が十店舗。「和」と「洋」、「新」
 と「旧」、異なる価値を相互に練り込ませてい
 くことで、このまちの持っているよさを保ち
 ながら、新しい文化を取り入れていきたい」。



お屋敷再生複合ショップ「練」(からほり倶楽部)。大正時代に移築された由緒ある屋敷に十店が集まった

「練」は「からほり倶楽部」がまちに寄せる思いと姿勢を形にして発信したものだという。松屋町筋と長堀通の交差点から一本東に入った通りの角に建つ、大正時代末期にこの地に移築された大きな母屋に蔵が付いた立派な屋敷。建物自体は長屋ではないのだが、ここでも部分的にセルフビルドを導入し、アプローチをオープンスペースに、その一角にはチャレンジショップも出店できるなど、再生によって敷地内にある種、長屋的な空間構成と運営が実現されているところに大きな特徴がある。



「練」の門内のオープンスペースでチャレンジショップも店を広げる

地下鉄鶴見緑地線「松屋町」駅からすぐの立地で、今や老若男女がまち歩きを楽しみながら立ち寄る、地域のランドマーク的存在である。からほり倶楽部の活動を代表する「惣」と「練」、二つの再生プロジェクト。筆者はそこに、三つの鍵が読み取れると思っている。一つは、前項でも紹介した「適切な範囲でのセルフビルド」。二つ目が、異なる価値の融合というコンセプトとしても表明されている「ソーシャル・ミックス」。そして、三つ目に、それらが可能にする「インキュベーション」※である。実は、これらの要素は、近世に高度に洗練された長屋で構成されたまちが担保していた都市の活力を支える仕組みと、うまく符号するのである。例えば、近世の長屋の裸貸しが、借家人による自分流の空間づくりを可能にし

ていたことは、部分的な「セルフビルド」に。表通りに面した表長屋と、路地の奥にある裏長屋で構成された奥行きのあるまちが、大きな商売から小さな商いや職人の住まいまで、都市の活力を支える多様な階層を受けとめていたことは、「ソーシャル・ミックス」に。一つのまちの中に重層的に、多様な階層がミックスされることで、裏長屋から表長屋へのサクセスストーリーもあれば、その逆も、また敗者復活もあり得ることは、「インキュベーション」に、という具合である。

「惣」においても「練」においても、個々の空間構成と運営の中に、まるで入れ子構造のように、長屋のまちならではの都市の活力を支える基本要素がしっかりと織り込まれ、まちに対して開かれていることは、注目に値する。

暮らしの場としての まちとのつながり

御祓筋から東へ、谷町筋にかけて、空堀商店街の南側・北側ともに一歩路地を入ると小ぶりな長屋が軒を寄せ合っている。古くからの住人に混じって、このまちに魅せられた人たちが、新たに長屋を改装して住まいやアトリエ、オフィスあるいはギャラリー等として利用する例が点々と見られる。

そんな、つつましい佇まいの長屋の一つに、二〇〇二年一月から暮らす有馬直人さん・珠穂さん夫妻は、奇をてらうこともなく、長

「屋のまちの暮らしに自然に溶け込んでいます。」「路地や商店街で、声を掛け合うのがあたりまえの暮らしだから、気がついたら自然にニコニコしていることが多くなりました」、そして、「人と人がまちの中で触れ合って生きていく、そんな環境の中で子どもが育っていくことが、何よりも素晴らしいことだと思わんです」と、長屋のまちが持つ、人を育てる力に気づかせてくれる。

空間としての長屋や路地だけでなく、言葉を交わしあう隣人の存在や、数々のお店の営みがあつてはじめてまちの暮らしが成り立つ。商店街はいわばまちの台所であり、茶の間であり、縁側である。その意味で、商店街や地域商業と長屋の関係が切れた時、まちはまちでなくなり、暮らしの場でなくなる。長屋再生とは、単なる建物の再生ではなく、まちと住まいや店とのつながりの再生であることを忘れてはならない。

谷町筋を越えて東側へ、五十軒筋(旧熊野街道)を北に行くと、やがて道沿いに黒い板塀をめぐらした端正な町家「楓ギャラリー」が現れる。オーナーの三島啓子さんは、町家・長屋が次々に姿を消していく様に心を痛め、一九九四年秋、生まれ育った町家の一部を改修してアート・ギャラリーをオープンした。「古い町家の魅力をたくさんの人に知ってもらいたくてオープンしました。大資本の開発よりも、一人一人の力を引き出していくまちづくりがいい」と。そして「楓ギャラリー」の裏手に並ぶ長屋には、若いアーティストたちが集まる。



三島啓子さんが生家を改修して開いた「楓ギャラリー」。門を入ると町家の一部と庭がギャラリーに

路地裏空間が、表現活動のインキュベーションの役割も果たしている。

人と地域の 持続的な発展モデルへ

上町筋方面へ足を伸ばすと、町家改修型デザインサービスセンター「陽だまり」が優しい表情で佇んでいる。空堀商店街で寝具店から福祉用具レンタル・介護サービス業を起こした白石喜啓さんが、新たに手がけたデザインサービス事業である。ユニークなのは、お年寄りの暮らしを支えるという視点、地域資源の長屋を活かしていくという視点、両方から持続的な地域の発展がアプローチされている点である。

白石さんは「からほり倶楽部との日ごろの付き合いがきっかけで、近所にある良質な長屋の活用を思い立った」という。白石さんが、事業化にあたってコディネイト・設計を依頼した、山本一馬さん・松富謙一さんは、からほり倶楽部の一員という顔も併せ持つ。

「陽だまり」は二〇〇三年三月にオープン。定員十名の小さな施設は懐かしい日本の住まいそのもの。木と土の温もりに溢れる空間、好みの場所で思い思いに時を過ごし、普通の台所をつくる食事を楽しむ。すべての部屋が



「楓ギャラリー」横の路地に入ると若い表現者が暮らす住まい兼カフェも

町家改修型デイサービスセンター「陽だまり」
(ライフ・ステージ)。ゆったりした長屋で中庭
を囲むプランが心地よい



中庭を囲み、光と風が流れ込む。デッキに腰掛ければ土や草花に触れることもできる。「施設を利用するお年寄りの心身の状態が、日に日に安定し食欲も増してくるんです。長屋の力としかいいようがないです！」と施設長の早川靖枝さんは驚きを隠さない。人とのつながり、まちとのつながり、自然とのつながりに対して、開かれた長屋の機

能がプラスに再生された時、いかに人間の生きる力に働きかけるものか、如実に物語っている例ともいえる。

地域の事業者である白石さん自らが事業主となつて、地域に根を張る長屋再生の新たなモデルを切り拓いたことは、持続的なまちづくりの道標の一つになるだろう(「陽だまり」については、本号特集でも山本一馬氏が紹介)。

第二話の終わりに

誌面の都合で紹介できなかった事例も多々あるが、駆け足で空堀商店街界隈の印象的なシーンのひとつかを追ひ、長屋再生ムーブメントの中に都市再生の鍵を探ってみた。空堀での取り組みに学び、再度確認しておきたいのは、長屋再生というものが、決して建物としての長屋を単に再生するという意味ではないということである。そうではなく、長屋が構成するまちの構造が担保していた機能こそ、本来再生する価値があるものだということである。それこそが、都市再生の鍵と言いつてもいいだろう。

自分流の表現をかなえ持続的な愛着につながる「適切な範囲でのセルフビルド」。さまざまな価値観・階層を受けとめて活力とモラルを育む「ソーシャル・ミックス」。夢を追う力・実現する力を育む「インキュベーション」。そ

れらが、「まちとのつながり」というストーリーの中で再生されていくこと。端的にいえば、人の力が再生されるまちということである。もちろん、それらを体現するハードとしての、長屋の構造に学ぶべき点もふんだんにある。

二〇〇一年から毎秋、空堀商店街界隈を舞台に、「からほりまちアート」が開催されている。路地や長屋や商店等々、まち中にアートやクラフトや音楽、パフォーマンスなど、さまざまな表現が練り広げられる。「地域に暮らす人たちが、まちの魅力に気づき、まちに誇りを持って、まちの未来を考えてほしい」。そんな願いを込めて、からほり倶楽部が主催するイベントである(前述の有馬直人さんが仕掛け人)。二〇〇二年度は、二日間で約一万人が来場。新旧の価値観を結び、まちの人々の意識を動かす原動力として育ちつつある。「まちとのつながり」というストーリーとともに、持続型の都市再生の鍵が少しずつ回り始めている。動き始めて数年の試行の途上とはいえ、その奥深くにある意味をしっかりと読み取っていききたいものである。

(大阪ガス エネルギー・文化研究所 客員研究員)

(※) インキュベーション(Incubation)は、抱卵、ふ化、育成という意味で、開業間もない事業主の独り立ちや新規産業等の起業を支援する、機能や施設、社会的なシステム等のこと。

参考文献

『大阪市立住まいのミュージアム図録 住まいのかたち 暮らしのならい』(二〇〇一年、大阪市立住まいのミュージアム)
『まちに住まう 大阪都市住宅史』(一九八九年・二〇〇二年、平凡社)
『からほり絵図』(二〇〇三年、からほり倶楽部)